

Junior Red Cross

No.168
Information

2020

青少年赤十字指導情報

実施報告 青少年赤十字海外支援事業

バヌアツ スタディーツアー

学校生活 × JRC

JRCの考え方や手法を学校教育に役立てよう

いじめ問題 × JRC

いのちと人道の問題として“いじめ”を考える



「一円玉」でいのちを救う!





日本赤十字社
社長 大塚 義治

人間を救うのは、人間だ



時の流れ行く早さには、今さらながら驚かされます。あの東日本大震災から、もう9年近くの歳月が流れました。改めて、被災された方々の苦難に思いを寄せるとともに、真の復興の日が一日も早く訪れることを心から祈りたいと思います。

深い傷跡が消え去ることはありませんが、私たちはこの経験から多くの教訓を学び、また、多くの感動的な出来事に出会いました。過酷な運命に立ち向かう人間の逞しさや健気さ、見知らぬ人々を結ぶ強い“絆”……。

大震災で大きな被害を受けた福島県に、会津という地域があります。そして会津といえば、幕末に、まだ幼さも残る若者たちが飯盛山で全員自決した「白虎隊」の悲劇が、今も人々の胸を揺さぶります。でも、その中にたった一人、奇跡的に生き残った少年〈飯沼貞吉〉がいたことは意外に知られていません。

宮城県石巻市も、大震災で深刻な被害を受けました。地域の医療機関のほとんどが壊滅的な打撃を受けた中で、辛うじて被災を免れた石巻赤十字病院は、まさに地域の医療・救護活動の拠点となって大奮闘をしました。その活躍は海外にも広く報道されたほどです。

そして、この時の病院の院長が、何と、あの貞吉小年の孫だったのです。偶然だと言えそれまでです。でも私は、幕末に命を救われた一人の少年が、一世紀半の後に、孫の手を借りて、今度は多くの人々の命を救ったと考えたい、いや、そう思っています。

またあるとき、私は支部の年配の職員の方に、こんな話を聞くことができました。

彼がまだ小学生の頃、大きな水害で被災したことがあるのだそうです。避難所で、心細く、不安で不便な生活が続きました。そんなとき、赤十字をはじめ、ボランティア、自治体の職員など多くの人々による懸命な救護・支援活動が、子供心にも、ほんとうに心強く、ありがたく思われたといいます。

ある日、行政の責任ある立場の人が被災者のお見舞いと激励に訪れ、「いま、何が一番ほしい？」と少年の彼にたずねました。彼は「カレーライスが食べたい」と答えたそうです。しばらくして、避難所に大量のカレーライスが届けられました。後にも先にも、あれほどおいしいカレーライスは食べたことがない、と彼は述懐していました。苦しいときに助けてもらった人間は、人々の優しさと支援の有り難さを生涯忘れることはない、と彼は実感を込めて言うのです。そしていま、赤十字の職員として仕事ができることを、心から嬉しく、また、誇りに思っている、と私に話してくれました。

私たちは、助けるときもあれば、助けられるときもあるのです。
“人間を救うのは、人間だ”——。

これは赤十字の掲げるスローガン、標語ですが、私は、この言葉をいつも自分に言い聞かせるようにしています。

14

13

9

8

5

3

1

青少年赤十字(JRC)とは



赤十字ユースボランティア紹介

日本縦断活動紹介

いじめ問題×JRC
いのちと人道の問題として“いじめ”を考える実施報告 青少年赤十字海外支援事業
バナアツスタディーツアー学校生活×JRC
JRCの考え方や手法を学校生活に役立てよう巻頭言
人間を救うのは、人間だ

日本赤十字社 社長 大塚 義治

Junior Red Cross Information
2020.4.1 No.168

青少年赤十字指導情報

※本誌の内容は、原則として2020年3月31日時点のものです。

■ 持続可能な開発目標(SDGs)とは？

SDGsとは、2001年に策定されたミレニアム開発目標(MDGs)の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。

■ 赤十字活動とSDGs

国際社会全体の開発目標であるSDGsの策定には、国際赤十字も深く関与しており、赤十字では目標の達成にも貢献しています。そのため、今回の指導情報で取り上げる青少年赤十字活動において関連性の高い目標をそれぞれ掲載しました。



■ SDGs 17の目標

- | | | |
|-----------------|----------------------|----------------------|
| 1、貧困をなくそう | 7、エネルギーをみんなにそしてクリーンに | 13、気候変動に具体的な対策を |
| 2、飢餓をゼロに | 8、働きがいも経済成長も | 14、海の豊かさを守ろう |
| 3、すべての人に健康と福祉を | 9、産業と技術革新の基盤をつくろう | 15、陸の豊かさを守ろう |
| 4、質の高い教育をみんなに | 10、人や国の不平等をなくそう | 16、平和と公正をすべての人に |
| 5、ジェンダー平等を実現しよう | 11、住み続けられるまちづくりを | 17、パートナーシップで目標を達成しよう |
| 6、安全な水とトイレを世界中に | 12、つくる責任つかう責任 | |

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



事例 ④

総合的な学習の時間 × 人道

「人道的な行動」について学ぶ

大阪府阪南市立尾崎小学校 講師 永田 恵氏



「勇敢な店主」を題材に授業に取り組む児童たち

× JRC

JRCの考え方や
手法を学校生活に
役立てよう

JRCには、人道教育や防
災教育といったコンテンツや



本校では、5年生を対象に、総合学習の時間で日本赤十字社の教材『人道的価値観をはぐくむ 国際人道法学習プログラム 誰もが人間らしく生きるために※2』を活用した授業を行いました。

今回の授業のねらいは、命の尊さや個人の尊厳を大切にする国際人道法の考え方（人道的価値観）を広く知らせることです。「勇敢な店主」の絵から、人道的な行動について考えたり、「ハチドリの子ずくーいま、わたしにできることー」の教材を読んでハチドリの子について話し合ったり、赤十字をつくったアンリー・デュナンのリーフレットを読んでこれまでの2つの話との共通点を考えたりしました。

子どもたちからは、「勇敢な店主の話で少年を店に入れることはとても勇気のいることだと思う。見習いたい」「人道的な行動とはどんな行動なのかかった」「少しでも自分にできることをすることが大切」といった感想を聞くことができました。また、友だちの考えに対して「よくもそう思う」「なるほど」といった共感の声や、「Aさんの考えがよかったと思います」といった友だちを認める姿が多くみられました。今回の授業で「人道的な行動」について、子どもたちなりに理解できたように感じています。

私は、子どもたちにだけでなく、校内研修や市の特別活動部会などで教職員にもJRCの考え方や手法、「人道」とは何かなどを伝えています。指導者講習会などで学んだことを、多くの先生方に伝えることでJRC活動が広まるのだと思って取り組みをしています。

COLUMN

「防災道德」授業の開発と普及

静岡大学 准教授・学長補佐 藤井 基貴氏

私たちの研究室では、学生たちとともに道德教育と防災教育を融合した「防災道德」と呼ばれる授業の開発を進めています。「防災道德」とは、災害時や復興時などにおける具体的な心理的葛藤場面を教材化し、さまざまな条件下のなかで取り得る選択肢について児童生徒が考え、議論するものです。これまでに行われた実践のなかには「避難所にペットを連れて行くのは許されるか」「津波で被災した江戸時代の宿場町の住民の立場になって、町の高台移転を決断するか」といった場面設定がありました。教師は、必要な基礎知識や起こりうるリスクについて授業内で情報共有しながら、話し合いの進行役を担います。授業の狙いは、児童生徒の思考力や判断力の向上を図るとともに、日常における備えや合意形成の重要性について気づかせ、防災を自分事として行動に移してもらうことにあります。これまでに導入いただいた教育機関は全国130以上にのぼり、学校では防災訓練の事前学習として取り組まれてきました。

こうした実践を推進・普及するにあたっては、各地の災害の歴史や最新の科学的知見に関する情報収集と分析が欠かせません。毎年、学生たちは被災地や防災センターなどに出向き、住民や専門家へのインタビューを重ねています。また、日本赤十字社の防災教材『まもるいのち ひろめるぼうさい』を活用した実践も行われてきました。この教材には、すぐに活用できるワークシートや指導案などに加えて貴重な映像資料もDVDで収録されています。授業のなかで具体的な状況を想定してもらう際にとても役立っています。

学校における防災教育をさらに推進するにあたっては、既存の教育課程を横断するカリキュラムの開発が求められます。地域でフィールドワークを行ったり、外部講師を招聘することも有効な手立てとなるでしょう。私たちは多彩な専門的知見を有する日本赤十字社との連携を通して、これからも防災を通した「社会に開かれた教育課程」の実現を推進していきたいと考えています。



※2：『人道的価値観をはぐくむ 国際人道法学習プログラム 誰もが人間らしく生きるために』はこちらからダウンロード可能です。
<http://www.jrc.or.jp/activity/youth/pdf/seisyonen130404-08.pdf>

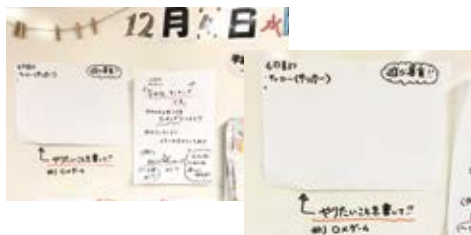


事例①

学級生活 × 掲示板

「掲示板」を教員・児童の「つながりツール」に

大阪府堺市立金岡小学校 教諭 福井 盛巴氏



「学級情報掲示板～つながれ！5くみ～ず～」

堺市立金岡小学校では、学級生活に関する情報を児童に伝える手段として、JRC活動の中で実践されている「掲示板」を活用した情報交換を取り入れています。

これまで子どもたちは、概して「自分で気づき、考え、実行する」「前もって準備する」ことが苦手で、直前になり焦って行動する姿も散見されました。そこで、こうした点を改善できるよう、2学期初めからホワイトボードを「掲示板」として活用した情報交換を学級の子どもたちに紹介しました。

始めたばかりの頃は、掲示板を見る習慣ができていないので伝達事項を見逃すことも多かったのですが、徐々に定着していきました。

掲示板で情報収集を行い前もって準備することで、すべての活動にゆとりをもつことができるようになりました。それにより、自分たちがやりたいことに取り組む時間を増やすなど時間の有効活用ができ、また、「掲示板に書いてもいい？」といったように、積極的に掲示板を自ら活用する児童も増えました。現在は、教員・児童間だけでなく、児童同士のつながりのツールとしても活躍しています。

事例②

ホームルーム × 先見

落ち着いた気持ちで1日をスタート

福島県いわき市立菊田小学校 前校長 松本 光司氏

いわき市立菊田小学校では、体育の研究指定を受けた2015年度から、学校生活のなかに青少年赤十字活動で行う「先見」という手法を取り入れています。

ある時期から、自分の気持ちを上手にコントロールできない子どもたちが友達とトラブルを起こす傾向がだんだんとみられるようになりました。そこで、一日のスタートを落ち着いた気持ちで始め、今日の一日を思い浮かべ自分なりの構想が持てるようになるため、呼吸と姿勢を整えて集中する時間を毎朝5分だけ設けるようにしたのです。

全校で取り組んだため生活のリズムを整えるまでが大変でしたが、「先見」が子どもたちの生活の中に浸透していくと、落ち着いて1時間目の授業にのぞむことができるようになりました。気持ちの切り替えができるようになり、いわゆる「切れる」子が少なくなり、できるまでがんばる力が身につくなど、子どもたちにとって良い効果を生むことができるようになりました。



姿勢と呼吸を整えて先見をします



学校生活

「気づき、考え、実行する」などの理念があります。そうした考えを基にした行動を促す手法・ツールなども多数用意しています。授業や学校運営のなかで青少年赤十字を活用した事例を紹介します。



事例③

総合的な学習の時間 × 防災教育

台風被害の経験を将来に生かす授業

千葉県大網白里市内小学校
学習サポーター 石川 安子氏



「まもるいのち ひろめるぼうさい」を使った授業に取り組む児童たち

2019年10月の台風19号は全国に大きな被害をもたらしました。今回の被害を受けて、本校では3年生41名を対象に、「総合的な学習」の時間を活用して「台風から自分の身を守ろう」というテーマで防災教育を行いました。この授業は、災害に対して自分たちに何ができるかを考えるための良い機会となると捉えて行ったものです。実施方法としては、チームティーチング(TT)の形式をとり、1単位(45分間)としました。

補助教材として『まもるいのち ひろめるぼうさい※1』を使用しました。教材を使ってみて感じたことは、付属の指導案が児童の実態に合わせて変更できるなど、教育現場での使い方に考慮された教材だという点です。

授業導入時にDVDを活用しました。分かりやすい映像であることと共に身近な出来事がテーマとなっていることもあり、その後の学習でも子どもたちが関心をもって参加していた様子がとても印象的でした。

また、この授業を通して、周囲の先生方からも「ぜひ取り組んでみたい」という声や『「相手を理解する」「相手を思いやる」「相手が何を望んでいるか想像する」など、指導者の働きかけで他の教科と共通して指導できそうだ」といった意見を聞くことができました。

※1：防災教育教材はこちらからダウンロード可能です。
<http://www.jrc.or.jp/activity/youth/prevention/>



暑くて熱い
8日間!

実施報告

青少年赤十字海外支援事業

バヌアツ スタディーツアー

南太平洋の国バヌアツで「青少年赤十字海外支援事業スタディーツアー」を実施。全国から集まった8名の高校生と2名の先生、2名の日本赤十字社職員の計12名が参加しました。

日本赤十字社では、平成29年4月より「1円玉募金」の通称で知られる青少年赤十字活動資金を活用し、各国の赤十字社のもと、ネパールとバヌアツの2カ国で衛生教育や防災教育などを中心とした支援事業を行っています。スタディーツアーは、募金の使われ方を視察する他、現地の青少年との交流を通して「国際理解・親善」を実践する事業です。

2019年のスタディーツアー先はバヌアツ。オーストラリアの北東の南太平洋に浮かぶ83の島で構成された人口24万人の小さな国で、日本と同じく地震や津波などによる災害リスクにさらされています。高校生たちは、8日間のツアー中、学校訪問や現地の家庭でのホームステイ等を通して貴重な体験をすることができました。



Vanuatu Study tour 2019 8/17(土)~24(土)



▲ Vila North School 訪問
バヌアツの子どもたちによるサイクロンの劇の披露後、日本メンバーから歌のプレゼントで交流。



▲ バヌアツの学校の先生による防災授業を見学。



▲ 防災についての知識が書かれた手作りの布を紹介するバヌアツ赤十字社コースボランティア。



▲ 開会式
開会式ではバヌアツ赤十字社が行ってきた防災事業の進捗や課題について発表された。



▲ 防災授業の準備
乗り継ぎ先のニューカレドニア・ヌーメアでは防災授業の準備を行った。



「JICA 訪問」
埼玉県立岩槻高等学校
荒木 菜那さん

スタディーツアー 5日目、現地で活動する国際協力機構(JICA)スタッフの方から「大洋州地域廃棄物管理改善支援プロジェクト(J-PRISM)」という現地でのゴミ問題を解決するための数々の取り組みについて、くわしく説明していただきました。さらに海洋資源の管理やバヌアツの若者を日本に招く研修・奨学金事業など、日本赤十字社とは異なるJICAの国際支援について知ることができ、さらに防災や国際支援について学ばなければいけないことを強くしました。



「バヌアツのラジオ局出演」
愛知県立南陽高等学校
山本 昂輝さん

バヌアツでの生活にも慣れてきたスタディーツアーの4日目、現地のラジオ局から取材を受けました。「なぜ防災について学ぼうと思ったの?」などの質問に英語で一生懸命に答えながら、バヌアツの人々の日本人へのシンパシーや災害への危機感などを感じ取ることができました。バヌアツにはまだまだ支援が必要です。今回知り合った多くのバヌアツの人々の命を守るために、青少年赤十字の活動などを通してこれから自分たちができることを考え、実行していくつもりです。



「防災教育」
福島県立郡山高等学校
昆 茉莉花さん

私が防災を学ぼうと思ったきっかけは、東日本大震災での被災経験です。日本同様、災害大国であるバヌアツでどのように防災教育が行われているかを自分の目で確かめてみたいと考え、今回スタディーツアーに参加しました。見学したのは首都ポートビラにある3校。日本赤十字社が制作した防災教材「ぼうさいましがいいがしきけんはっけん! ※1」を使った授業のほか、サイクロンや火山噴火に関する詩や劇の発表など楽しみながら真剣に授業を受ける子どもたちの姿が印象的でした。



▲ 日本の学校生活を紹介するメンバー

▲ Mele Centre School 訪問
サイクロンが来た時にとるべき行動を学ぶ様子。



▲ Sea Side Community School
防災教材「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん!」を活用した防災授業を教室で実施。



▲ 日本文化交流
習字や折り紙を教えている様子。



▲ JICA
JICAの主な活動として、海洋資源の資源管理や研修・奨学金事業等についての説明があった。



▲ 商工会議所
商工会議所では、バナアツでのビジネスライセンスを取得した会員に対して支援する事業を行っている等、商業についても学んだ。



▲ バナアツ気象・地象災害局
日本の気象庁のような機能を担う機関。現在、津波警報をいつでも出せるようにするプロジェクトを展開中。



▲ ラジオ局でのインタビュー
現地のラジオ局3局(ラジオ112、Buzz FM、ラジオ107)から日本メンバーと指導者が取材を受けた。



▲ 見学内容の振り返り
休憩時間を使い、授業の後すぐに振り返りを行った。



▲ キッチン
郷土料理であるラップラップもご馳走になりました。



▲ ホームステイ
参加者全員が、バナアツ赤十字社コースポランティアの故郷メレ村にホームステイした。



▲ 教育訓練省
バナアツの教育行政を司る機関。防災教育に関して、バナアツ赤十字社と協働して活動を行っている。



「バナアツ赤十字社訪問」
大阪国際滝井高等学校 (大阪府)
雨宮 珠音さん

閉会式では、多くの方々の歓迎の挨拶を受け、現地の方からネックレスのプレゼントや感謝の言葉をいただき、「ああ、支援をするってこういうことなのだな」と今まで取り組んできた自分の行動に少し自信を持つことができました。しかし、バナアツ赤十字のスタッフのお話を聞いてみると、まだまだ支援が足りていないのが現実。8日間の研修で知ることができたバナアツの現状を、多くの人に知ってもらうために活動していきたいと思っています。



「避難訓練」
滝川第二高等学校 (兵庫県)
溝口 和愛さん

人々はいつも笑顔で優しく、世界一幸せな国バナアツ。「本当に支援の必要があるの?」。そんな私の疑問は海辺から高台まで約2kmを走った避難訓練で覆りました。海に囲まれた低い土地で、防波堤が少なく、大きな病院がないことは、津波などの災害時に「死」に直結する悪条件だと実感できました。この衝撃は現地に行かなければ味わえなかったでしょう。バナアツの子どもの笑顔を守るために、自分に何ができるかを考えていきたいと思っています。



「ホームステイ」
栃木県立真岡女子高等学校
仁平 温香さん

ホームステイ先の家は玄関にドアがなく、豚などの家畜も放し飼いという日本ではなかなか味わえないワイルドな環境。でもホストファミリーの方々はとてもやさしく、たくさん話しかけてくれました。私が日本のお土産にお箸をプレゼントしたら、夕食時にお箸を使う練習をしてくれたこともうれしかったです。私が「バナアツの生活は幸せですか?」と訊ねると「はい。この村に住めて幸せ」との返事。「不便」は必ずしも「不幸」はではないのだと痛感しました。





嵯峨野高等学校
(京都府)

中井 正典
教諭(団長)

青少年赤十字の活動に四半世紀近く関わってきました。国内外の多くの人々の役に立つ赤十字の活動は、10代の生徒たちが生命の尊さ、生きる目的や意義を考えるかけがえのない機会となることでしょう。

今回のスタディーツアーでは現地での防災教育や避難訓練への参加、そしてホームステイ体験を通して私にもたくさんの学びと気づきがありました。生徒たちも人ごとではなく自分ごととして、バヌアツでの防災を考えるようになったと思います。毎晩のホームルームでのディスカッションを通して、徐々に成長し、考えを深めていく生徒たちをととても頼もしく思いました。



高岡向陵高等学校
(富山県)

浦上 真由美
養護教諭

「世界一幸せな国」であり、「最貧国」でもあるバヌアツ。養護教諭としては手術ができる病院がないなど医療のリスクが気になりました。電気やガスのない家で暮らす人々も多く、当初はそうした不便さばかりが気になりましたが、現地の人々と親しくなると私たちとの共通点にも気付くようになりました。人を助けたい気持ちや子育ての悩みなどはどこの国でも一緒です。最初は緊張気味だった生徒たちもすぐにバヌアツの人々の温かさに包まれて、のびのびと過ごしていたようです。

この経験を活かし、今後も国内外の活動を続けてほしいですね。



▲ 文化センター
バヌアツの伝統工芸や砂絵を学んだ。



▲ 事後研修
9月にメンバーが再会。帰国後、自分がどのような活動を行うのか、それぞれの考えを共有、整理していく。



▲ 送別会
スタディーツアーの最終日。バヌアツ赤十字社で日本メンバーは最後に一言ずつ感謝と感想を述べた。



▲ 津波避難訓練
ランチタイムに地震が起こり、津波が発生したという想定で、2キロ離れた避難場所まで小学生たちと一緒に移動。



実践報告事例

スタディーツアーに参加したメンバーは、帰国後、この事業で得た経験を活かし、様々な活動を行っています。



富澤二葉さんは2019年10月に都内の小学校を訪問



日々のJRC活動や実際に見てきた一円玉募金の使われ方、バヌアツでの体験談を児童たちに話しました



「こぼれ話」
鎮西学院高等学校 (長崎県)
宮田 杏さん

ホームステイ先へ向かうバスの中、急遽私の訪問先に変更があり、バスのドライバーだったポールさんの家にお邪魔することになりました。一家には5人の子どもがいて、私が泊まった日には近所の子どもが20名近くも集まって現地の歌を歌ってくれて、とても楽しく過ごすことができました。夕食の後、お礼に日本の文化を教えたり、お菓子をあげたらすごく喜んでくれました。最後に「シスター・アン！」と呼んでくれたことが印象深く心の中に残っています。



「研修を振り返って」
順天高等学校 (東京都)
富澤 二葉さん

8日間であんなの事を学び、経験しました。また異文化交流の楽しさを知り、防災意識も高まりました。そして何より「自分は何ができるのか」をよく考えるようになりました。またいつかバヌアツに「戻りたい」。優しくて元気で、笑顔が素敵なバヌアツの人たちに会いに行きたいです。そのためには私自身もっと防災やバヌアツについて勉強して、次にバヌアツの人たちと再会する時には今よりもっと成長した私になれるように頑張ります。

いのちと人道の問題として いじめを考える



令和元年11月23日(土)に日本赤十字社本社で開催した「青少年赤十字指導者中央講習会」。「いじめ」と「不登校」をテーマに、講演と各都道府県の指導者によるグループディスカッションが実施されました。
ここでは群馬県高崎市教育長 飯野 眞幸氏の講演を中心に紹介します。



＜プロフィール＞



高崎市教育委員会 教育長 飯野 眞幸氏

群馬県高等学校教員を経て、群馬県及び高崎市教育委員会で「いじめ」問題に取り組む。平成20～21年度群馬県青少年赤十字指導者協議会会長。平成23年より現職。高崎経済大学などで教職を目指す学生の指導にも携わる。

青少年赤十字指導者中央講習会

開会挨拶
(本社・パートナーシップ推進部長 大野 博敬)

アイスブレイキング

報告「青少年赤十字事業の取組みと長期ビジョン」
(本社青少年・ボランティア課長 藤枝 大輔)



講演「青少年赤十字と人道の価値観の普及について」
(日本赤十字国際人道研究センター 副所長 角田 敦彦氏)



講演「全ては子どもたちのために」
(高崎市教育委員会 教育長 飯野 眞幸氏)

事例発表



1. 玉村町立玉村中学校(教頭 増田 眞次氏)



2. 日本赤十字社千葉県支部(職員 石川 安子氏)



グループディスカッション及び情報共有

■ Every Child Matters ～全ては子どもたちのために～

「いじめ問題」と学校のリスクマネジメントのエキスパートである飯野氏の講演は、参加した全国の教員、教育関係者から熱い注目で迎えられました。

飯野氏は、いじめ問題へのこれまでの取り組みのなかで、「命の大切さ」「思いやり」「自主性とリーダーシップ」を育むJRCの教育を積極的に取り入れてきました。

講演で飯野氏がまず指摘したのは「いじめを生徒指導上の問題として片づけてはいけない。いのちの問題なのだ」と、いじめを未然に防止することの重要性でした。そして学校には児童・生徒の心身の安全を守る責務があり、「いじめをぜったいに許さない、いじめられた児童・生徒はほとんどん守り抜く」ことが重要であると力説されました。

英国の学校でのいじめ事情なども視察した飯野氏は、日本に特有な「いじめの4層構造」を指摘。4層とは、「被害児童生徒」を中心にした「加害児童生徒」、周囲で煽り立てる「観衆」、さらにその周りにいる「傍観者」という構図のことで、「この構図をなくさない限りいじめは減らない」と話します。

高崎市教委で自ら作成した「学校におけるいじめ防止プログラム」ではいじめを生む状況を改善していくため、学校が年間で取り組むべき具体的な指針を定めています。同教委ではさらにSNSによるいじめの防止プログラムの作成、小中学校の校長室を「いじめ防止推進本部」として相談室にするなどの試みを実施。校長のリーダーシップのもと、児童・生徒と一体となり、さらに家庭や社会とも連携した取り組みで効果を上げています。

■ JRC 活動をいじめ問題に活用してほしい

講演後、飯野氏も加わったディスカッションに参加した青森県の高校教員に感想をうかがうと、「講演はJRCといじめ・不登校問題を結びつけるためのヒントがたくさんつまっていた。各地の教員の方々とのディスカッションでそれがさらに具体化したので、自分の高校に持ち帰って取り組んでいきたい」と意気込みを語りました。また、神奈川県教員委員会からの参加者は「学校でのいじめ問題は各校で状況は異なるが、JRCという共通の土壌で語り合うことで広い視点が持てるのではないかと述べました。

最後に、飯野氏は「JRCの活動を学校がもっとうまく活用してほしい。またJRCもいじめや不登校の問題について積極的に学校にアプローチしてもいいと考えています」とJRCへの期待を熱く語られました。

各ブロックの取り組み

日本縦断活動紹介

全国の青少年赤十字(JRC)加盟校の中から、最新の取り組みをご紹介します。JRCを積極的に活用し、児童・生徒の温かな心を育てている6つの取り組みをヒントに、日ごろのJRC活動や学校生活をますます充実させていきましょう！



中山町立中山中学校 (山形県)

中学校

いのちをつなぐ 町をつなぐ 防災教育

高橋 郁子 教頭

テーマ 防災教育

本校では、防災を基本テーマとした探究課題を学年ごとに設定し、活動しています。具体的には、3年生が保護者や地域の方に安全で住みよい町づくりを発信する活動を、2年生が地域の人々と一緒に避難所運営訓練を行っています。

避難所運営訓練のきっかけは、防災についての総合的な学習を進める中で、生徒から「避難所」という言葉を聞くようになったことです。平成29年から活動をはじめ、2年生の生徒たちが本部、名簿作成、物資、施設管理、救護、情報、清掃衛生、要支援者対応、炊き出しの各班に分かれ、避難者役の1年生や保護者、地域住民からの質問や要望に対応しました。

初めての体験のためわからない点が多く、教員と生徒、地域住民の間で訓練のねらいやイメージの共有化を図るのが難しかったですが、突発的な出来事が多発し条件の違う環境下において、適切に対応するにはどのような力が必要かを生徒一人ひとりが理解することができるようになりました。



自分の住んでいる町の防災対策を学びます



これまで学んだことを実践し、地域の方からご協力いただき、生徒はさらに学べき事をみつけていきます



常葉大学造形学部（静岡県）

大学生
×
幼稚園
保育所

赤十字の想いを子どもたちに伝えるために～紙芝居や絵本の作製～

日本赤十字社静岡県支部
組織振興課奉仕・青少年係 山本 結子 主事

テーマ 大学生とコラボ

日本赤十字社静岡県支部では、若い人たちをはじめとする多くの人に、日本赤十字社が「人間のいのちと健康、尊厳を守る」という使命のもとに活動していることを知ってもらうために、学校等で活用できる教材制作に取り組んでいます。手始めとして、“そもそも赤十字とは何か”をわかりやすく伝えるため、赤十字の創始者であるアンリー・デュナンの生涯を描いた紙芝居「アンリー・デュナン物語」を作製し、続いて子どもたちの「思いやり」や「やさしさ」の心を育むきっかけになるように、マスコットキャラクターであるハートラちゃんを主人公とした絵本「ハートラちゃんのおはなし」を作製しました。

日本赤十字社が行った「赤十字に対する意識調査」では、活動の認知度が50歳を境に若くなるにつれて低くなっていることがわかりました。そこで、若い世代に



加盟校にて紙芝居を教材に学年道徳を実施

赤十字への興味・関心を持ってもらうために、小・中・高等学校や特別支援学校の児童生徒には紙芝居を、幼稚園・保育所・子ども園の園児たちには絵本をそれぞれ配付。これらの教材を活用することで、子どもたちが積極的に青少年赤十字活動へ取り組んでほしいと考えました。

10～20代の若い人に赤十字のことを学ぶ機会になってほしいとの考えから、常葉大学造形学部の学生に原画制作を依頼しました。学生たちからは、「赤十字がどんなことをしているのか、これまでは深く知ることがあまり無かったが、今回の活動で深く知ることができた」という声が寄せられるなど、理解を深めてもらう良い機会をつくることができました。



絵本の原画引き渡し式にて
原画の制作を手掛けた常葉大学造形学部の皆さんと加盟園の子どもたち



紙芝居
『アンリー・デュナン物語』



絵本
『ハートラちゃんのおはなし』

静岡県支部のWebサイトから、紙芝居『アンリー・デュナン物語』と絵本『ハートラちゃんのおはなし』の読み聞かせ教材をダウンロードすることができます。

<http://www.shizuoka.jrc.or.jp/jigyo/junior/>





千葉県安房西高等学校 JRC 部 (千葉県)

高等学校

小さな気づきが世界を大きく変える

JRC 部顧問 高野 清孝 教諭

テーマ 感謝

本校 JRC 部の合言葉は「育てて頂いた他人(ひと)に感謝、地域に感謝、世界に感謝、地球に感謝」です。自分が生かされている身の回りに気づき、感謝を伝え、その思いを深め、広げること为目标に活動をしています。

1995 年 1 月 17 日に阪神・淡路大震災が発生し、自分たちに何かできることはないかと考えたことから本校での活動が始まりました。まずは「人を助ける技術」を身に付けようということから「救急法」の習得をしました。

「気づき、考え、実行する」という青少年赤十字の態度目標のように、本校でも生徒の自主性を尊重することを大切にしていますので、顧問から指示はしません。生徒

は常に悩み、皆で考え、相談しながら活動しています。身近な活動が、実は世界の子どもたちを救うことに繋がっていたり、小さな気づきが実は地球という大きな視点で考えることになったりすることを徐々に理解することで、世界に貢献したいという生徒が増えています。



「館山から響け！皆の心」(東日本大震災復興支援チャリティコンサート)



「館山の海から世界の海に・・・愛を届け！」(館山北条海岸クリーン作戦)



第 4 (近畿) ブロック (兵庫県)

海外赤新月社
×
日本赤十字社

マレーシア赤新月社 ジョホールバル支部より指導者が来県

日本赤十字社 兵庫県支部 奉仕課 井上 星奈 主事

テーマ 国際交流

マレーシア赤新月社ジョホールバル支部からメンバー 12 名と指導者 3 名が来日し、メンバーを第 4 ブロック各支部で 2 名ずつ受入れ、併せて兵庫県支部では指導者 3 名(セガール団長、タンさん、エイミーさん)の受入れを行いました。指導者らは兵庫県支部を表敬訪問した後、阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターや姫路赤十字病院、姫路城等を見学。受入校である滝川第二中学校・高等学校を訪れ、青少年赤十字指導者と両国の教育制度や、支部との関わり方等について情報共有や意見交換を行いました。

この国際交流事業は、日本赤十字社第 4 ブロック各支部青少年赤十字メンバーと指導者が、マレーシア青少年

赤新月メンバー等との意見交換や文化交流等を通じて、赤十字が目指す国際理解・親善の深化を図り、青少年赤十字事業の発展・推進に寄与することを目的に実施しているものです。

マレーシア赤新月社の青少年指導者の皆さんは、この国際交流事業について「メンバーにとって、日本赤十字社とマレーシア赤新月社の違いを知り、互いの文化をより深く学び体験する良い機会になりました」と語ります。

お互いの文化的・宗教的背景の違いなどを受入れ、理解し、尊重することが大切だと改めて考える機会となりました。「自分の考えと異なるものや理解できないものは排除してもよい」と考えず、共に生きることが求められる場面は、私たちの日常のなかにも多く存在しています。普段の生活においてもこのことを大切にしないといけなと強く感じました。



両国赤十字・赤新月社青少年指導者



両国青少年指導者による意見交換



愛媛県西予市立城川小学校 (愛媛県)

小学校

城川小学校での取り組み

原田 尚幸 教諭

テーマ 赤十字週間

本校では、毎月8日を含む1週間を赤十字週間と設定して活動しています。月曜は「あいさつの日」、火曜は「奉仕の日」、水曜は「なかよしの日」、木曜は「ベルマークの日」、金曜は「募金の日」として、自ら考え、行動するように心がけています。

西予市では、すべての小・中学校が青少年赤十字に加盟しており、多くの学校が40年以上前から活動をしています。市をあげて児童生徒がいのちと健康を大切にするなどの赤十字の精神を育成したいと考え、始められたといわれています。

赤十字週間を設けることで、「気づき、考え、実行する」

を意識しながら様々な活動ができるようになってきました。児童たちは、赤十字週間の全校遊びなどで異学年と交流することにより、相手を思いやる心が育まれています。今後は、毎日の生活の中でもそうした点を意識できるよう、声かけをしていこうと考えております。



毎朝行う奉仕活動



全校遊び



募金・ベルマーク集め



長崎県青少年赤十字 (長崎県) 指導者協議会高校部会

高等学校

生徒研修会九州ブロック 血液センター訪問

長崎県立佐世保東翔高等学校 橋本 広子 教諭

テーマ 献血

私たちは、青少年赤十字(JRC)活動の一環として献血の呼びかけを行っています。しかし、集められた血液がどのような過程を経て供給されているかについて知らない生徒も多く、献血の大切さを理解するために血液センターへの訪問を始めました。

長崎県青少年赤十字指導者協議会高校部会では、九州ブロック血液センターを訪問し、血液の検査・製剤・供給の過程を見学する研修会を行いました。保存されている赤血球、血小板、血漿の現物を見ながら職員の方から

の説明を聞くことができ、貴重な体験になりました。

以前はJRC加盟校のみの研修会でしたが、2017年に『長崎県高文連JRC・ボランティア専門部』が発足し、JRC加盟校以外の高校にも呼びかけ、隔年で訪問するようになりました。

研修会を通して他校の取り組みを知り、活動のアイデアをもらうなど刺激を受け、また、役員として部会を企画・運営することで、生徒が主体的に行動できるようになりました。献血の呼びかけや募金活動では、地域の人たちから励ましの言葉をかけていただき、大変力になっています。



完成した輸血保管庫の見学



検査と製剤の説明

青少年赤十字メンバーが今、
ユースボランティア
として活躍中！



みやもと か れん
宮本 佳蓮さん

1994年生まれ。京都市出身。
小学4年生から現在まで様々な形で赤十字
活動が続けている。
現在、日本赤十字社京都府支部の若手の指導
講師としても活躍中。

2004
10歳・小学4年

❖ 青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センター(トレセン)に初参加

親元を離れての宿泊活動に興味があり参加したのが赤十字との出会いのきっかけ。野外炊飯やフィールドワーク、夜の集いが楽しくて翌年以降も参加しました。他校の友達やスタッフと会えることが1年で一番の楽しみでした。



2007
13歳・中学1年

❖ 中学生になり、校外の国際交流や募金活動に参加



支部から送られてきた案内を見て国際交流に参加。マカオから来たJRCメンバーと、京都の神社仏閣や加盟校を訪問しました。英語は習いたてで分からなかったけど、異文化に興味を持つきっかけになりました。

2009
15歳・中学3年

❖ JRC部のある京都府立鳥羽高校を受験

2010
16歳・高校1年

❖ 鳥羽高校JRC部に入部、青少年赤十字スタディー・センター(スタセン)に参加

2011年3月のスタセンに参加する予定が、東日本大震災のため中止に。翌年に京都代表として改めて参加しました。被災したメンバーや本社スタッフの生の声を聞き、防災教育の道に進むことを決めました。



2011
17歳・高校2年

❖ JRC部部长に就任、高校生メンバー協議会の会長に就任

2013
19歳・大学1年

❖ 京都府青年赤十字奉仕団に入団



JRCの先輩方と同じように青奉に入団。これまでの活動に加えて、車いす駅伝等のパラスポーツ支援やHIV予防啓発などの活動にも関わるようになりました。団の代表として、外部団体との橋渡しもしました。

❖ 東日本大震災の被災地を訪問(岩手県・福島県)

JRC時代に考えた活動計画書を基に残暑見舞いを作成し、仮設住宅に住む方へ届けました。本社主催の被災地訪問活動にも参加し、現地の方から経験談を聞くことで防災への思いが強くなり、大学でも防災教育を専門に学びました。



2019
25歳・社会人

❖ 現在支部指導講師、トレセンの講師、ユースボランティアとして活躍



奉仕団の中ではJRCと防災をメインに担当しています。防災教材『まもるいのち ひろめるぼうさい』の製作にも携わりました。
現在は指導講師として支部や本社が開催するリーダー研修の企画運営も行っています。

〈青少年赤十字(JRC)とは〉

はじまり



子どもたちの「気づき」をきっかけに

第一次世界大戦のとき、カナダ、アメリカ、オーストラリア、イタリアの学校の生徒と先生は、戦争で苦しむヨーロッパの人々をなぐさめ励ますため、手紙やプレゼントなどを赤十字を通じて届けました。

これがきっかけとなり、青少年赤十字が誕生しました。

人道的な価値観を世界の子どもたちへ

赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できる人間に成長してほしいという願いから、赤十字社連盟（現在の国際赤十字・赤新月社連盟）は1922年に青少年赤十字を創設することを決めました。日本の青少年赤十字は、1922年に滋賀県の守山尋常高等小学校（現在の守山市立守山小学校）に誕生した「少年赤十字」から長い歴史をもち、2022年には100周年を迎えます。

青少年赤十字が大切にしていること

青少年赤十字の 実践目標

健康・安全

生命と健康を大切にする

奉仕

人間として社会のため、人のために
尽くす責任を自覚し、実行する

国際理解・親善

広く世界の青少年を知り、仲良く
助け合う精神を養う

気づき

身近な問題を発見する

考え

問題解決のための道筋や
方法を探る

青少年赤十字の 態度目標

実行する

活動に取り組み、評価と反省を
次へ活かす

青少年赤十字の導入・ 活用のメリット



赤十字を教材に、「生きる力」を育てる

青少年赤十字の活動は、子どもたちの思考力・判断力・表現力を養うとともに、コミュニケーション能力や言語活動の充実を期待できます。

赤十字には、人間の命と健康、尊厳を守るために世界中で活動する中で得た経験やネットワークなどがあります。赤十字そのものを「教材」として、存分にご活用ください。

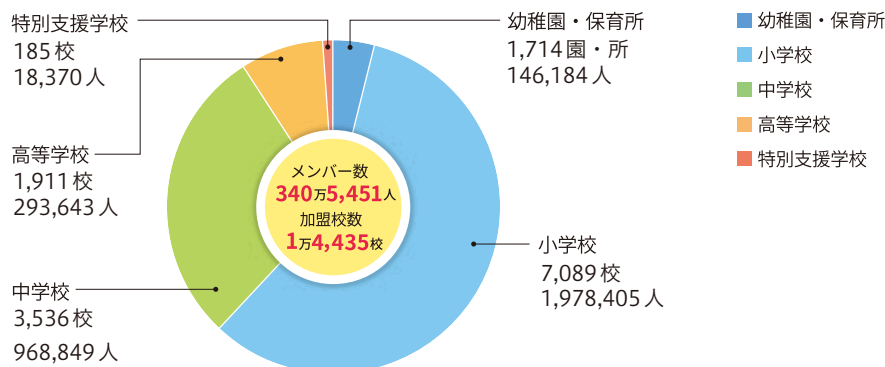
加盟校数 **1万 4,435校**

メンバー数 **340万 5,451人**

加盟校数・メンバー数ともに2019年3月現在

青少年赤十字 加盟校数・メンバー数 (平成30年度)

※この5年で約30万人増加しています。





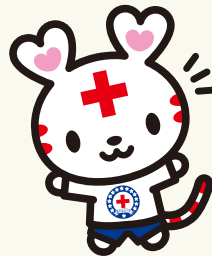
資料で見る青少年赤十字

[http://www.jrc.or.jp/
activity/youth/document/](http://www.jrc.or.jp/activity/youth/document/)



防災教育

[http://www.jrc.or.jp/
activity/youth/prevention/](http://www.jrc.or.jp/activity/youth/prevention/)



Junior Red Cross Information 2020

青少年赤十字指導情報 No.168

日本赤十字社 東京都港区芝大門1丁目1番3号
TEL. 03-3437-7083 FAX. 03-3432-5507 <http://www.jrc.or.jp/>